

今後の区立幼稚園のあり方について

令和7年（2025年）9月

中野区教育委員会事務局保育園・幼稚園課

目次

はじめに	P 2
第1章 区立幼稚園の沿革	P 3
1 区立幼稚園4園の整備	P 3
2 区立幼稚園2園を私立認定こども園に転換	P 3
3 区立幼稚園2園の施設老朽化	P 3
第2章 社会状況の変化と幼稚園の現況	P 4
1 社会状況の変化	P 4
2 幼稚園の現況	P 6
第3章 区立幼稚園が果たしてきた役割	P 8
1 質の高い幼児教育の提供	P 8
2 幼児教育と学校教育の連携	P 9
3 多様な背景を持つ子どもの受け入れ	P 9
4 地域における幼児教育の中核的存在	P 9
5 子育て世帯から求められるニーズへの柔軟な対応	P 10
第4章 区立幼稚園に対する意見	P 10
1 保護者等からの意見	P 10
2 学識経験者からの意見	P 14
第5章 今後の区立幼稚園のあり方	P 19
1 中野区が目指す幼児教育の姿	P 19
2 区立幼稚園の役割と機能	P 19
3 今後の取り組み	P 19
4 定員の柔軟な見直し	P 20

はじめに

少子化の進行、核家族化や就労環境の変化に加え、コロナ禍を経て、個人の価値観やライフスタイルが多様化し、小学校入学前の子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。

そのような状況の中、かみさぎ幼稚園は令和10年に、ひがしなかの幼稚園は令和12年に築60年を迎え、施設の老朽化が進むとともに、社会状況の変化への対応や多様な背景を持つ子どもの受け入れについて、十分な役割を果たすことが難しくなっています。

このたび、区立幼稚園の建替整備に向けて、区立幼稚園が果たしてきた役割や区立幼稚園に対する保護者等の意見を改めて検証し、今後の区立幼稚園のあり方について区の考え方をまとめましたのでご報告します。

令和7年（2025年）9月
中野区教育委員会事務局保育園・幼稚園課

第1章 区立幼稚園の沿革

1 区立幼稚園4園の整備

中野区では区立幼稚園が整備されるまで、幼稚園教育は私立幼稚園が中心となり担ってきましたが、幼稚園の利用を希望する子育て世帯の増加に伴い、私立幼稚園が不足するようになりました。

区では、私立幼稚園の少ない地域において、補完的に区立幼稚園を整備することとし、昭和43年にかみさぎ幼稚園を、昭和45年にひがしなかの幼稚園を、昭和49年にみずのとう幼稚園を、昭和56年にやよい幼稚園を開園しました。

2 区立幼稚園2園を私立認定こども園に転換

区は、平成18年に策定した「新しい中野をつくる10か年計画」及び平成22年に策定した「同計画（第2次）」において、区立幼稚園2園を私立認定こども園に転換する計画をまとめました。

認定こども園化の目的は、多様なニーズに対応した教育・保育を選択できるよう、民間活力を活かしながら認定こども園の展開を図っていくことです。

地域や区議会等における様々な議論を経て、平成22年にやよい幼稚園は私立の幼保連携型認定こども園として、みずのとう幼稚園は私立の幼稚園型認定こども園として開園しました。

一方で、かみさぎ幼稚園とひがしなかの幼稚園は、近隣に私立幼稚園が少ないことから、区立幼稚園として存続することとなりました。

その後、3園の私立認定こども園が開園し、令和7年4月1日時点で、区内の認定こども園は5園となりました。

3 区立幼稚園2園の施設老朽化

かみさぎ幼稚園は令和10年に、ひがしなかの幼稚園は令和12年に築60年を迎えます。施設を建替整備するには高額な工事費を要し、整備後にも相応の維持費を伴います。

そのため、施設を建替整備して区立幼稚園を存続することについては、中野区が目指す幼児教育の姿や区立幼稚園の役割等を改めて検証したうえで判断する必要があります。

第2章 社会状況の変化と幼稚園の現況

1 社会状況の変化

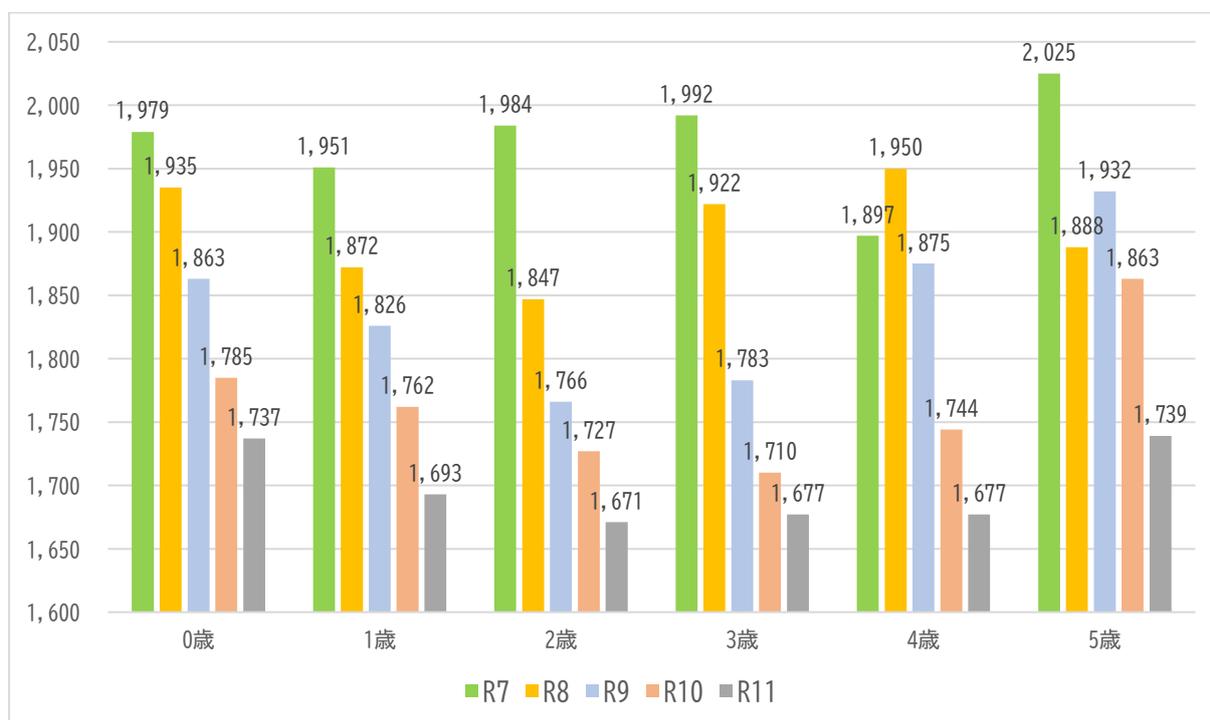
区の人口推計によると、中野区における就学前の0歳～5歳人口は、今後も減少傾向が続くことが見込まれています。（図表1）

一方で、我が国の25歳から44歳の女性就業率は上昇を続け、令和6年に80.8%に達しました。（図表2）

このことから、中野区における就学前の子育て世帯の保育需要率は上昇し、認可保育所の園児数は全体として増加が続いていますが、今後は概ね横ばいとなると推測しています。（図表3、図表4）

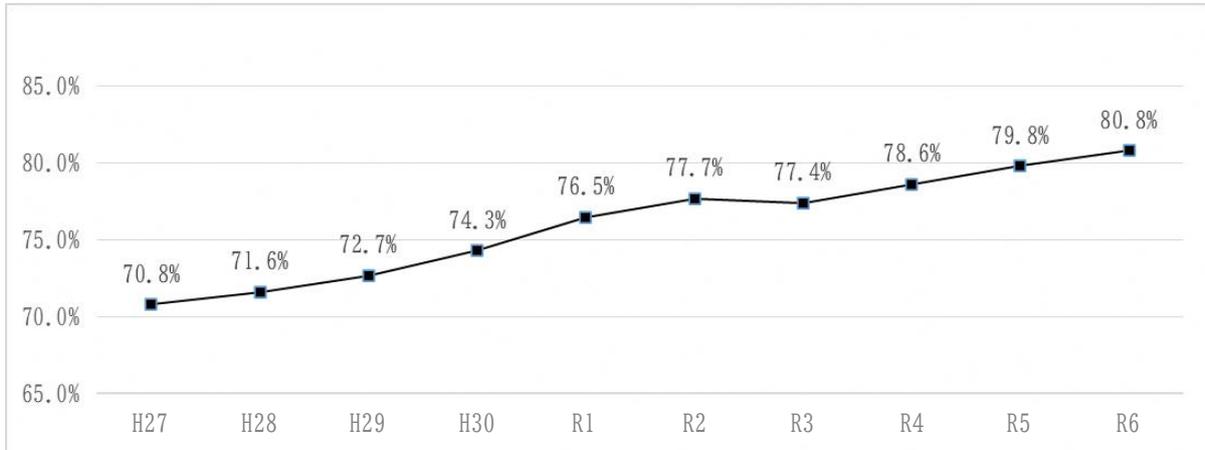
（図表1）中野区の就学前人口の推計

（単位：人）



中野区 子ども・子育て支援事業計画（第3期）より作成

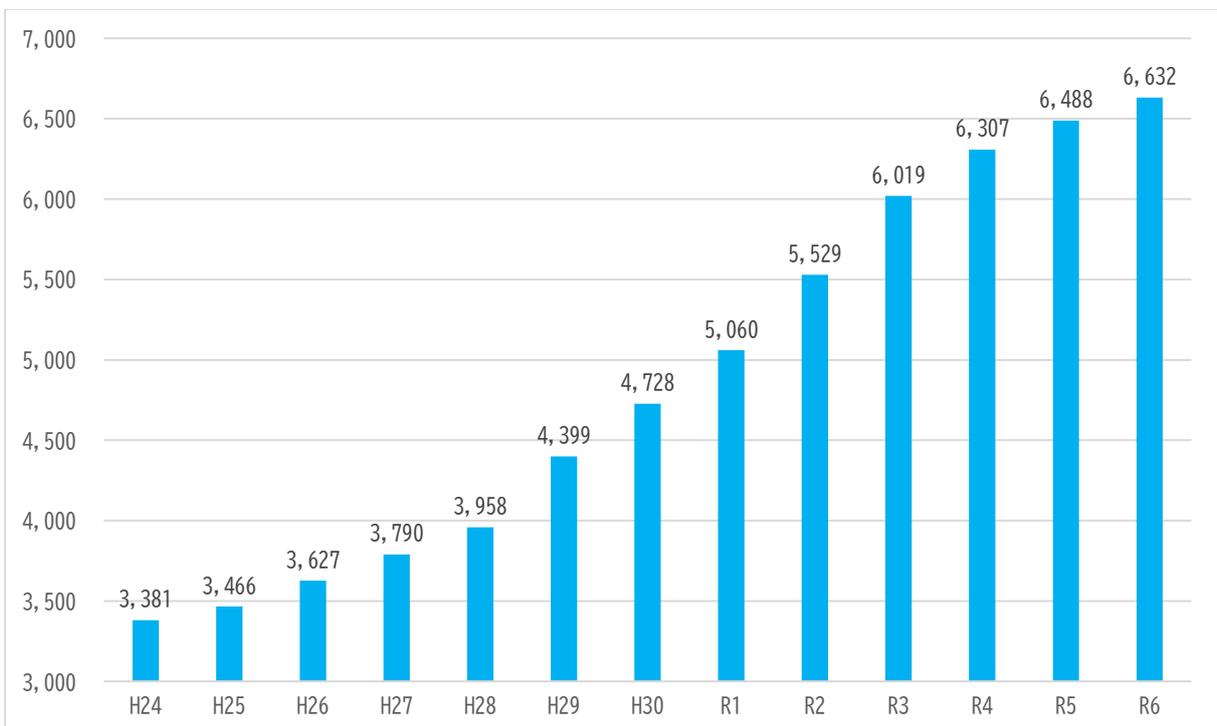
(図表2) 日本の女性就業率の推移 (25歳~44歳)



こども家庭庁 保育所等関連状況取りまとめ (概要資料) より

(図表3) 中野区の認可保育所の園児数の推移

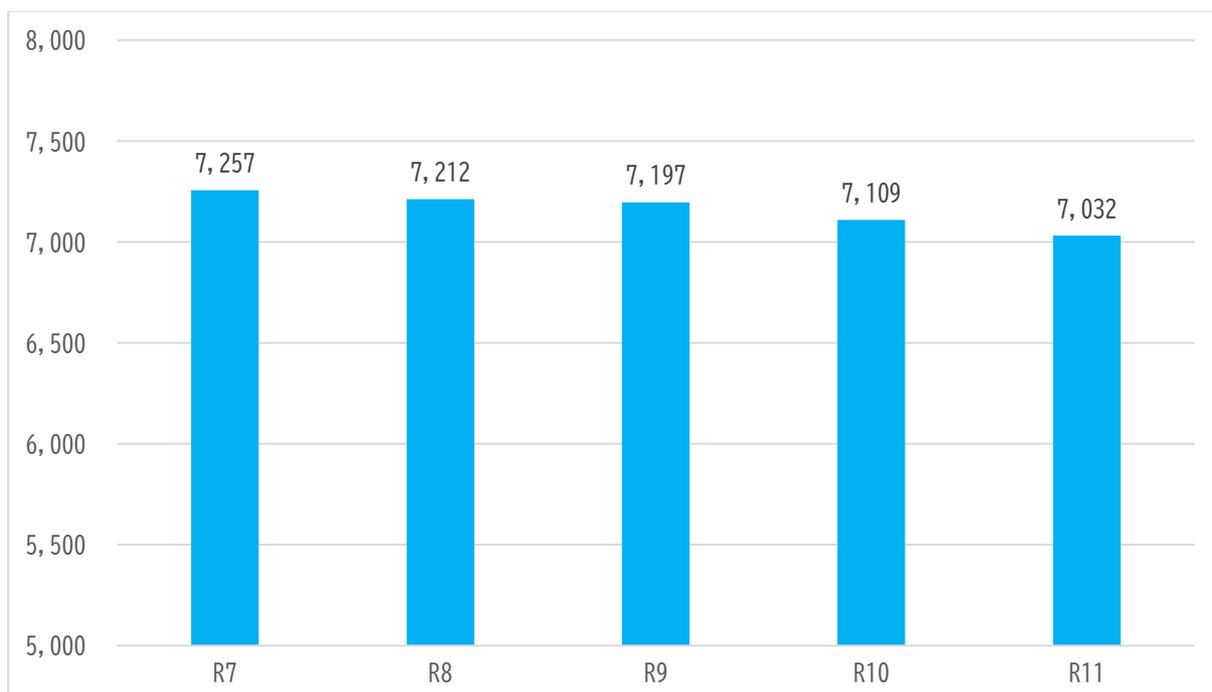
(単位:人)



中野区 統計書より作成

(図表4) 中野区の0～5歳児の保育需要数の推計

(単位:人)



中野区 子ども・子育て支援事業計画(第3期)より作成

2 幼稚園の現況

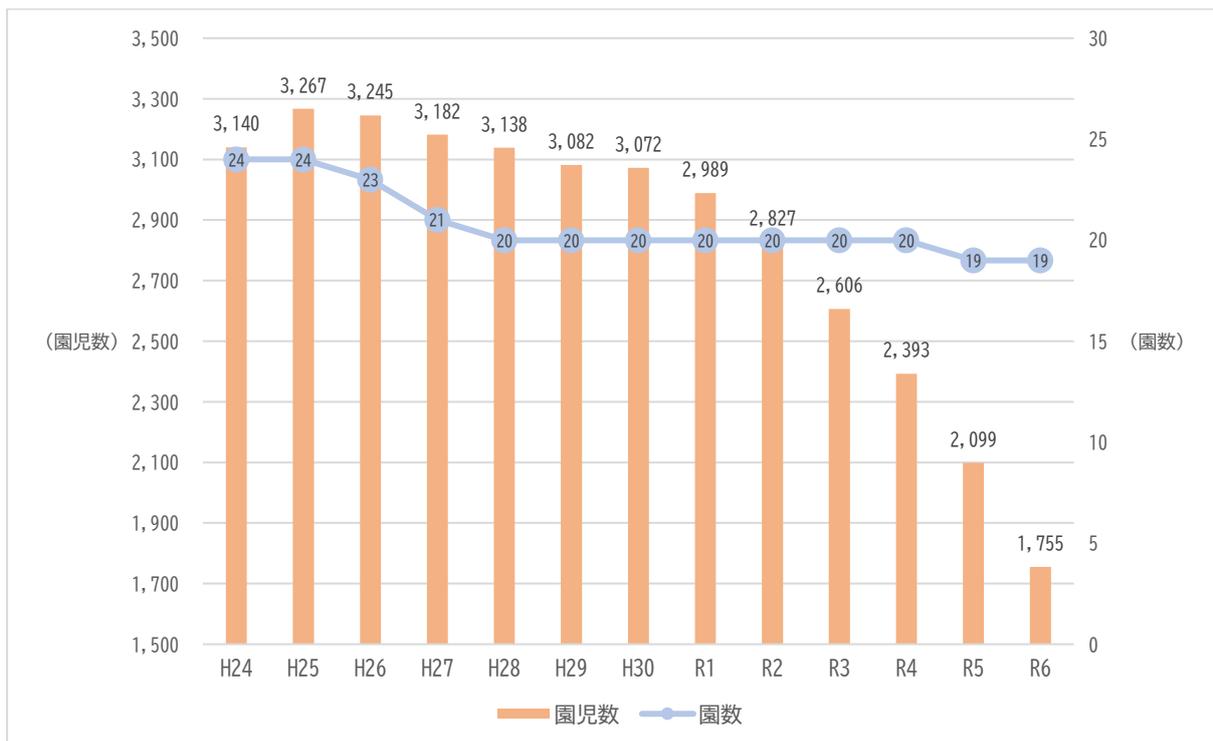
保育需要が上昇する一方で、私立幼稚園は、平成25年の園数24園、園児数3,267人をピークに、以降は減少しています。(図表5)

区立幼稚園は、平成22年のやよい幼稚園、みずのとう幼稚園の認定こども園化以降は2園体制を続けており、園児数は概ね横ばいとなっています。(図表6)

幼稚園全体としては園数、園児数ともに顕著に減少しており、大きな要因として、女性就業率の上昇と保育需要の増加により、就学前の子育て世帯が長時間保育を求めようになったこと、待機児童対策として国の求めによる保育園の急設、その後の出生児減によることが考えられます。

(図表5) 中野区の私立幼稚園の園数と園児数の推移

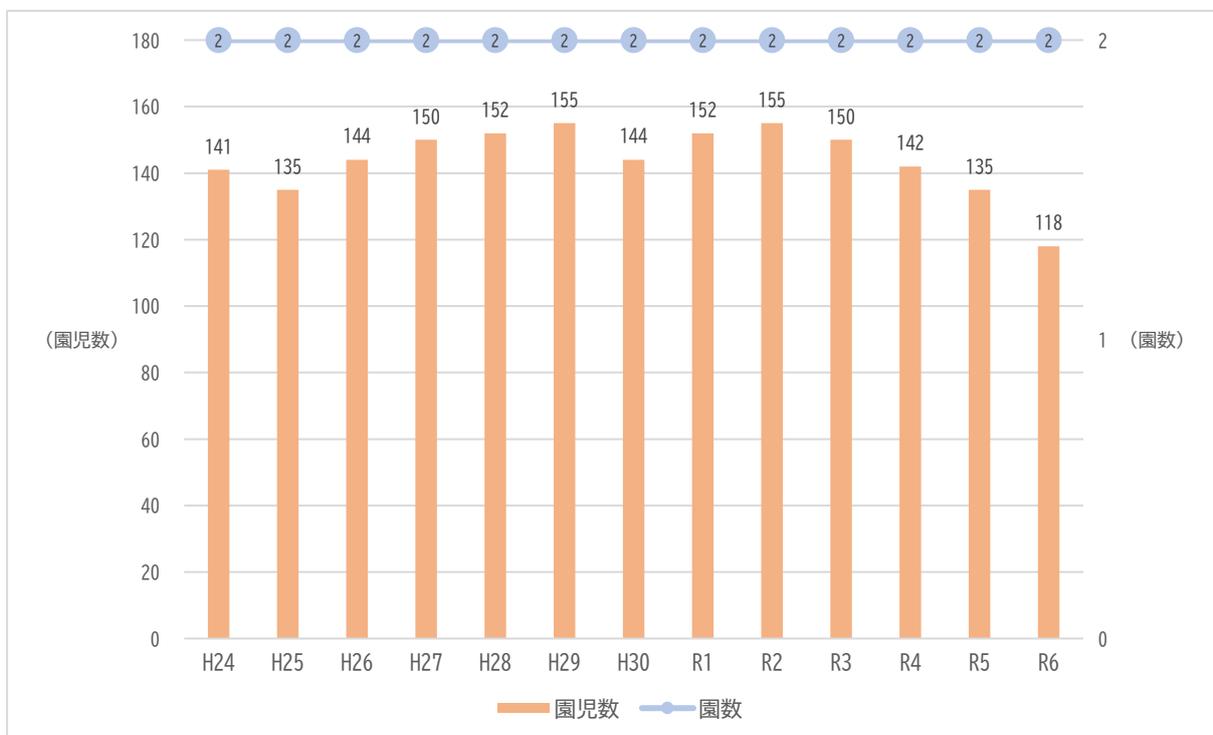
(単位 園数：園、園児数：人)



中野区 統計書より作成

(図表6) 中野区の区立幼稚園の園数と園児数の推移

(単位 園数：園、園児数：人)



中野区 統計書より作成

第3章 区立幼稚園が果たしてきた役割

幼稚園を取り巻く環境が大きく変化する中で、これまで区立幼稚園2園は主に以下の役割を果たしてきました。

1 質の高い幼児教育の提供

幼児教育施設においては、小学校教育の土台となる教育活動を実施していくことが重要です。幼稚園教育要領が示すように、子どもたちは集団生活や遊びを通じて先生や友達と関わり、様々な経験を積み重ねて成長していきます。

区立幼稚園では、私立幼稚園と連携しながら就学前における学びの場として質の高い幼児教育を提供し、地域に対して幼児教育の重要性を発信しています。

また、区立幼稚園は、長年、教育課題に向き合い、実践的な研究を行ってきた実績があります。中野区教育委員会「学校教育向上事業」研究指定を受けるなど、研究・研修を継続的に行い、自己研鑽に努めることは教育者としての責務であるという高い意識をもち、研究実践を通して教員の資質向上と園の教育力の向上に努めてきました。

平成30年度には、「幼稚園教育要領」等で重視されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」や小学校への円滑な接続の実現を目指し、かみさぎ幼稚園が上鷲宮小学校、とちの木保育園とともにアプローチカリキュラム等の研究実践に取り組みました。この研究成果は、保幼小連携における大きな提案となりました。令和5年度には、ひがしなかの幼稚園が、遊びの中でこそ幼児は育まれると考え、「夢中になって遊ぶ幼児を育てる～「こうしたい」という思いを支える教師の援助と環境～」をテーマに研究発表を行いました。遊びの中の幼児の姿を小学校以降につながる「資質・能力」から捉え、幼児教育と小学校教育の学びの連続性についても明確にしました。

さらに、区立幼稚園2園で構成する研究会(中野区立幼稚園教育研究会:幼教研)において2年継続の研究テーマを掲げて研究を進めるほか、私立幼稚園との合同研究会(中野区幼稚園教育研究会:区幼研)において成果発表を継続的に行うなど、区の幼児教育の質の向上に寄与してきました。

今後も幼稚園教育要領に則った教育の実践について、研鑽を積み、多様な子どもたち一人ひとりの成長を目指して幼児教育を推進していくことが必要です。

2 幼児教育と学校教育の連携

遊びを中心とした幼児教育と教科の学習を中心とする小学校教育では教育形態は異なりますが、幼稚園、保育園から義務教育に至る子どもの発達や学びは連続しており、円滑に接続することが望まれます。

しかし、小学校入学後に、これまでの園生活との違いなどから、子どもたちが小学校での生活や雰囲気になかなか馴染めず、学習に集中できない、教師の話が聞けずに授業が成立しないなど、1年生の教室では学級がうまく機能しない状況も見受けられます。

区立幼稚園では、一人ひとりの個性を踏まえた関わり方を共有するなど、小学校への円滑な接続に努めています。また、区幼研での研修・研究の推進や、保幼小連絡協議会における幼稚園・認定こども園・保育園、小学校・中学校の連携を図っています。

今後も区立幼稚園が中心となり、就学前教育・保育施設と小学校との連携をより一層深めて、教育の接続に力を入れ、双方の視点から課題解決に努めていく必要があります。

3 多様な背景を持つ子どもの受け入れ

区立幼稚園は、多様な背景を持つ子どもたちが安心して通うことができ、他の子どもたちと同じように教育を受けられる場としての機能を有しています。

障害のある子どもや外国籍の子どもなど特別な配慮を要する子どもは、毎年、一定程度在園しています。将来、特別な配慮を要する子どもが地域社会の中で積極的に活動し、豊かに生きることができるよう、同世代の子どもや地域の方々と交流し、協働する機会を大事にしています。

4 地域における幼児教育の中核的存在

区立幼稚園は、これまで60年近くにわたって地域における幼児教育の拠点としての役割を担ってきました。保護者、卒園生や現場の職員は、長年にわたり実践してきた幼児教育に対する誇りと愛着を強く持っています。

また、地域における幼児教育の中核的存在として、地域の就学前施設との連携や未就園児親子に対しての支援も行ってきました。区立幼稚園の施設を活かした幼児教育施設同士の交流や、地域の未就園児親子が園庭や園舎内で遊び、直接的・具体

的な体験ができる未就園児の会の実施などを通し、子育て中の保護者が安心感を得られ、子育ての楽しさが実感できるような役割を担っています。

今後は、幼稚園でも就園前の子どもたちの年齢や発達に応じた質の高い教育を保護者とともに推進していく必要があります。

5 子育て世帯から求められるニーズへの柔軟な対応

就学前の子育て世帯からの長時間保育のニーズを受け、区立幼稚園2園は、令和元年度から在園児を対象に預かり保育（幼稚園型一時預かり事業）を実施しています。保護者の就労状況が変化する中で、預かり保育を行うことにより、子育て世帯の支援にも取り組んできました。

第4章 区立幼稚園に対する意見

1 保護者等からの意見

(1) 意見交換会の実施結果

かみさぎ幼稚園は令和10年に、ひがしなかの幼稚園は令和12年に築60年を迎えるにあたり、これからの区立幼稚園のあり方について、地域との意見交換会を両園において以下のとおり実施しました。

① かみさぎ幼稚園

実施概要	
実施日	令和6年12月3日
参加者	地元町会、在園児・卒園児保護者等 27名
主な意見	
幼稚園需要について	・多様なニーズに応えるということに関しては「働きながら幼稚園教育を受けたい」ニーズもある。
幼児教育について	・当園を卒園した2人の子は、必ずハンカチとティッシュを持って出かける。幼児教育の中で細かな生活習慣が培われていたことを感じる。

主な意見	
幼児教育について	<ul style="list-style-type: none"> ・我が子は挨拶の声小さくて悩んだが、担任の先生は、昨日より大きな声だったことや目を見て挨拶できたことなどを見逃さず褒めてくれた。 ・我が子が誕生会で司会を頑張ったことが他の先生方にも共有されていて、園の先生方が皆で褒めてくれた。 ・畑や園庭で野菜を栽培している。栽培して収穫して食べるという一連の体験が本人の自信につながっている。
小中学校との連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学校との連携が活発に行われているため、我が子は既に中学生になってからやりたいことの展望を持っている。 ・幼児教育の一環で小中学校と関わる機会を持てるのがありがたい。小学校を見学して就学後のイメージを持つことができた。 ・当園を卒園した地元の中学生在が当園の運動会にボランティア参加してくれた。卒園生からその友達へ、その保護者へと地域のつながりが広がっている。 ・地域のPTA活動、ママさんバレー、野球チーム等を引っ張っているのは当園の卒園生の保護者である。保護者にもかみさぎ幼稚園魂が根付いている。 ・幼稚園教育要領を見ると、当園で実践していることがそのまま書かれている。
預かり保育と給食提供について	<ul style="list-style-type: none"> ・預かり保育の拡充については、朝夕の人員確保が十分でないままで誰がやるのか。給食提供の開始は誰が求めているのか。我が子を通わせていた時のお弁当は小さいものだった。白いご飯だけの子もいた。それでいいのではないか。 ・自分は就労していても保育園ではなく幼稚園の預かり保育を希望した。働きながら幼稚園教育を受けさせたい保護者はいる。
認定こども園化について	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園化されると、子ども一人ひとりを丁寧に見ることができなくなってしまうのではないか。幼稚園として継続して欲しい。

② ひがしなかの幼稚園

実施概要	
実施日	令和6年12月2日
参加者	地元町会、在園児・卒園児保護者等 15名
主な意見	
幼稚園需要について	<ul style="list-style-type: none"> ・2年保育で入園する子どもは少ない。3年保育の定員を拡充すれば区立幼稚園に入園する子どもは増える。 ・家賃、物価高、教育費等の負担が大きく、共働きをせざるを得ない世帯もあるが、幼児教育に積極的に携わりたい保護者は多い。
幼児教育について	<ul style="list-style-type: none"> ・先生方が勉強熱心で研修・研究にも取り組まれている。支援員の方も担当ではない子どものことも覚えて接してくれている。子どもと保護者と先生方が一緒に取り組む園で、季節ごとの行事も充実し、保護者も学ぶことができる。 ・運動会等の行事を通じて子どもたちが成長し、遊びの中で年長組が年中組に教える、年中組が年少組に教えるという姿を見ることができる。 ・かみさぎ幼稚園と合同でプラネタリウム見学をしているのがよい。 ・未就園児の子育てを支援するのは、子育て先進区の取組そのものである。 ・園庭の果実を収穫してジュースを作っている。子どもの目の前で実践して製造過程を楽しんでいる。このような環境を残して欲しい。
小中学校との連携について	<ul style="list-style-type: none"> ・卒園生である中学生が学校実習で当園を訪問する地域のつながりが素晴らしい。
預かり保育と給食提供について	<ul style="list-style-type: none"> ・保育時間は朝と晩に1時間ずつ増やして、8時～18時に預かってもらえればかなり助かる。 ・園舎を建て替えて給食提供を開始するのであれば、給食室で自園調理して欲しい。
認定こども園化について	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園化で幼児教育に携わる保護者が少なくなると、素晴らしい行事も減ってしまう。

主な意見	
認定こども園 化について	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園は働く保護者が多い。助かる保護者は多いのだろうと思う。幼稚園組と保育園組に分かれると、それだけ運営も大変になるので、人員配置も必要になる。 ・保護者によって求めるものが違う。多様性に応じるという意味では、このまま幼稚園の形で残してほしい。

(2) アンケートの実施結果

かみさぎ幼稚園、ひがしなかの幼稚園の建替を見据え、令和7年1月に在園児の保護者を対象に、給食と預かり保育に関するアンケートを以下のとおり実施しました。

① かみさぎ幼稚園

質問：「家庭から持参する手作り弁当」について、あなたのお考えに近いものを選んでください。

回答	回答数（61件）
子どもの個性（好き嫌い・アレルギー・食事量など）に合わせられる手作り弁当を希望する	15件（25%）
小学校からは学校給食になるのだから、幼児期くらいは親の手作り弁当を作ってあげたい	8件（13%）
手作り弁当持参は納得しているが、週に数回でも給食や注文弁当があったらうれしい	35件（57%）
手作り弁当持参は親の負担感が大きい、注文弁当があるなら活用したい	3件（5%）

質問：早朝（教育時間開始8：50よりも前）の預かり保育は、利用したいと思いませんか。

回答	回答数（61件）
必要ない	31件（51%）
8：30～利用したい	21件（34%）
8：00～利用したい	9件（15%）

② ひがしなかの幼稚園

質問：「家庭から持参する手作り弁当」について、あなたのお考えに近いものを選んでください。

回答	回答数（52件）
子どもの個性（好き嫌い・アレルギー・食事量など）に合わせられる手作り弁当を希望する	5件（10%）
小学校からは学校給食になるのだから、幼児期くらいは親の手作り弁当を作ってあげたい	2件（4%）
手作り弁当持参は納得しているが、週に数回でも給食や注文弁当があったらうれしい	39件（75%）
手作り弁当持参は親の負担感が大きい、注文弁当があるなら活用したい	6件（11%）

質問：早朝（教育時間開始8：50よりも前）の預かり保育は、利用したいと思いませんか。

回答	回答数（52件）
必要ない	28件（54%）
8：30～利用したい	11件（21%）
8：00～利用したい	13件（25%）

2 学識経験者からの意見

今後の区立幼稚園のあり方に対する学識経験者2名からの意見は次のとおりでした。

中野区の公立幼稚園存続の意味についていくつかの観点から述べさせていただきます。

1. 環境を通した「遊び」を中心とする保育の質の高さ

現行の幼稚園教育要領では、第1章総説の第1節幼稚園教育の基本に、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであること」と「遊びを通した指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」と書かれています。

実際には、教師にとっては、一斉活動を指導することの方が難易度が低く、それに比べると、環境に幼児が主体的にかかわって、自発的な活動としての遊びを通した指導をすることは、大変難易度が高いことは広く知られています。例えば、一斉活動であれば、その一つの活動に幼児が取り組む場合に準備する環境と、必要となるであろう援助を、その活動をするねらいと内容に即して考えて計画して保育をすれば実践することが可能です。それに対し、自発的活動としての遊びによって育てるとなると、まずは、どの幼児がどんな活動を誰と、どんな物を使ってするか予想を立てなければなりません。それも、自発的活動なので、一人で遊ぶ幼児もいれば、10人位で大掛かりに遊ぶ幼児もあり、また、2～3人でじっくりと取り組むことが同時に起こります。その遊びの内容も、ごっこ遊びや製作遊び、運動遊び、虫取りなど同じ時間に、多種多様な遊びをしてもよいことが原則ですから、翌日の遊びの種類や、そこに誰が参加するか、どんな風に幼児が展開させていこうとするのかの予想が大変難しく、また、当然のことながら、予想外の遊びが始まることもあります。また、それぞれの遊び、また、その遊びに入った幼児によって、さらには、刻々と変わる遊びの展開によって、ねらいや内容を精妙に調整しながら、環境を準備したり、幼児と相談して再構成したり、援助する必要があります。一方で、幼児にとっては、出来る限り制約を設けず自由感あふれる保育が求められます。そうすると、多様な遊びの展開における安全への配慮も複雑なものになるをえません。以上述べたように、自発的活動としての遊びを中心とする保育は、一斉活動が、全員が教師の目の届くところで、同じ活動をするのに比べて格段に難易度が高い保育ということがわかるでしょう。

公立幼稚園では、環境を通した、遊びを中心とした指導が、いくら難易度が高い保育であっても、「幼稚園教育要領」が規定するものである限り、それを目指して保育を行っていくことになります。実際、登園後、2時間近く遊ぶなどということが当たり前公立幼稚園では行われています。しかし、これは、決して簡単なことではなく、その長い時間にわたって、幼児が充実して遊べるように、環境や援助を工夫する必要があるだけでなく、教師としては、それぞれの幼児にとって大切な育ちにつながるねらいや内容を意識しつつ、その一方で、幼児は夢中になって自分がやってみたいと思う遊びに没頭し、遊びを通して大きな満足感やもっとやってみたいと次の目標に自ら向かって思う存分遊んでいるという心持ちであることが必要です。ところが、この保育は、これほど難易度が高いにも関わらず、一般的な教育は、小学校以上の教育のイメージが強いため、一斉活動でみんなが同じことができることがよいことだと考えられていることが多いために、保護者からは、評価されにくいという問題があります。この点については、保育学関連の学会の会長として、正直、忸怩たる思いがあります。とはいえ、本学会の当時の会長である秋田喜代美先生を中心にして作られ、令和6年度に、子ども家庭庁から示された「はじめの100か月の育ちビジョン」においても、「安心と挑戦の循環」がビジョンとしてあげられており、それは決して安全管理をして何か一斉に挑戦させることではなく「遊び」を通してこどもが育つことを示しているのだと解説されていることから、今後も求められている保育の在り方であることがわかります。

けれども、私立幼稚園等においては、これを実現することは、公立幼稚園よりも非常に難しいということが出来ます。なぜなら、保育を行う上での難易度が高いこと、それにも関わらず、保護者の支持が得られにくいこと、経営上の問題からもより課題が難しいものになるからです。また、それだけではなく、私立幼稚園には「幼稚園教育要領」とは別に、各園に独自の「建学の精神」があります。そのため、「幼稚園教育要領」の比重が公立幼稚園ほど大きくなりにくいという点もあるかもしれません。

さらに、「幼稚園教育要領」の「環境を通して」また、「遊びを中心として」という考え方は、幼稚園のみにとどまりません。保育所や幼保連携型認定こども園の指針や要領においても、全く変わりません。しかし、特に、保育所は、設置基準が幼稚園とは大きく違うため、保育室や園庭が狭いことが多く、その上、年齢の幅も広いため、同じ時間に同じ場で一緒に異年齢の子どもたちが思い切り自発的活動としての遊びが展開できることや、そのための環境を準備しておくことなどが、大変難しいという現実があります。もちろん、翌日の環境にするために、子どもが作ったものを残しておくことも難しいことです。これは、思い切り遊ぶ同じ場所で、食事し、着替え、寝なければならないという現実を考えるとさらに難しくなります。こうしたことを考慮すると、公立幼稚園が存在することによって、各要領・指針の求める、「環境を通して」「遊びを中心とする保育」の実際の在り方の実践と子どもの遊びの姿や育ちを、実際に示すことができます。それは、公立であるからこそその役割であり、そして、「幼稚園教育要領」の趣旨をきちんと実践で示す意味は非常に大きいと考えます。

最後に、付け加えると、中野区の公立幼稚園は、東京都、あるいは、全国の国公立幼稚園の中でも特に質の高い保育をする園として、中野区の公立幼稚園ができた当時から、「研究の中野」と呼ばれるほど有名でした。この財産は、現在にもしっかりと受け継がれていると、長年中野区の保育を見る機会が多かった私からは自信をもって評価できます。

この意味において、中野区の公立幼稚園の存続を強く願わずにられません。

2. 多様性の時代を生きる幼児を育てるモデルとして

中野区の公立幼稚園は、東京都の中では、多様性を持った幼児が共に育つ保育実践が行われていた歴史は古く、また、その質は大変高いものがありました。それは、現在ではインクルーシブ保育と呼ばれていますが、統合保育と呼ばれていた時代から、中野区の公立幼稚園には存在しており、また、その当時から、十分に、インクルーシブ保育を呼べるものであったことを私は知っています。

私は、中野区の公立幼稚園の中では、多様性を持った幼児が存在していても、その幼児の必要とすることをよく知って、助けるべきところで助けるべき範囲、決してお世話係的にはならず、助け合うことができる幼児が育つことに、心から驚いてきました。これは、一緒に遊ぶ大切な友達という感覚の中で、共に生活する大切な仲間という感覚の中で、自然に育っていく姿です。そして、多様な幼児がそれぞれの違いを大事に思い、相手を尊重し、大好きな友達になる過程を中野区の公立幼稚園では、本当に当たり前のように見てきました。

それは、決して一方的に誰かだけが育つという保育ではなく、だれもが、非常に高度に、多様性を尊重する幼稚園の中で育ちあうという姿だという点は特筆すべきでしょう。そして、関係は常に対等なので、どの子に対しても、意見も言えるし、誰かだけに何か許されたり、助けられるということではなく、やってみたい、助けてもらいたいと思うどの子も、やってみる、助けてもらう権利があるという、極めて高度なレベルの保育が出来ているのです。研究書によると「障害理解」は、小学校高学年にならないと出来ないと書いてあります。しかし、中野区の公立幼稚園の幼児たちは、「障害」を理解するのではなく、「対等な人間同士として相手」を理解することを、「遊び」の中で自然に体得していくのです。これは、現在、日本中で、また、世界の心ある国においては、大人の社会においても、実現が目指される人と人と極めて重要なあり方であり、大切にされるべき価値だと考えます。

3. 中野区という地域性と保護者の意識の高さ

中野区に、このような公立幼稚園が存在し、質の高さにおいて、大変すばらしい理由について、私は長いこと疑問に思ってきました。その明確な答えが私にあるわけではないのですが、まずは、教育について極めて安定した地域の方々の考え方が存在するように思います。中野区は、東京都の中では、公立小学校、中学校の評価が東京都の中でも高い地域です。地域の人たちが、幼児期から、先へ先へと追い立てるような教育を求めず、本当の意味での教育の質を求める意識が高いのではないかと推察しています。

学校種によって文言は変わりますが、日本の教育では、3つの資質能力を定めています。幼児期には、①豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かたり、できるようになったりする「知識・技能の基礎」、②気づいたことやできるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力の基礎」、③心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい

生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」となっています。この3つの資質・能力に関する具体的な文言を知らなくても、保護者の方、地域の方々は、幼児期には、豊かな環境の中で、自由に遊びながら、このように育っていくことによって、長い目で見たときに、最も、高度な育ちにつながるということ、自然に感じ、理解されている方が多いのではないかと考えます。だからこそ、中野区の2つの園においては、1で述べたような「環境を通して」、「遊びを中心とする保育」の実践が素晴らしいものになりえており、2で述べた、未来を先取りするような多様性を尊重する社会の基礎となる園での全ての子どもの育ちが実現できているのだと考えます。

4. 保育学研究者として中野区の公立幼稚園の存続を強く願います

このような幼児教育が、2園であってもモデル的に残ることは非常に貴重です。保育学研究者として、また、現在の立場で明言させていただくとしたら、一般社団法人日本保育学会現会長として、中野区の公立幼稚園の存続を強く願います。

場合によっては、幼保連携型認定こども園（幼稚園型の子ども園等）という方向性も未来を拓く可能性があると考えています。その理由は、現在、人手不足もあり、国の施策がどうしても、共働きを推奨せざるを得ない状況にあります。そうすると、公立幼稚園が素晴らしい幼児教育を行っていると考え、地域の保護者がいたとしても、その教育を受けることが出来なくなってしまいます。そして、保育所は児童福祉施設であるということが、どうしても一つのハードルなること、また、残念ながら、設置基準が厳しすぎて、十分な環境を準備することが困難だということです。それらの点を考慮して、出来る限り、公立幼稚園のもつ学校教育法に基づいて存在する良さを、中野区のあるべき保育のモデルとして残すためには、環境を豊かに整えることができる幼稚園と同等の広さがどうしても必要です。幼稚園と同じく、学校教育法にも基づいている子ども園という選択肢を残すことも視野に入れることも併せて提言させていただきたいと思います。

【意見】

区立幼稚園2園は、就学前教育充実と教育政策推進拠点園として、中野区に必要である。区立幼稚園が存続するために、現在の社会状況と保護者の要望を反映した建替整備を実施してほしい。

【意見理由と具体的な内容】

1. 質の高い就学前教育を実現する園となる

幼児期は遊びを中心とした総合的な指導が求められる。小学校以上の学習のように、全国一律の教科書があり、学ぶ内容や順番が決められていれば、どこにいてもある程度の教育の質を保つことができる。しかし、遊びを通して学ぶという教育方法は、子どもの主体性を尊重しながら、意図的に教師が関わっていく必要があり、とても難しい教育方法である。教師がどのように子どもの興味や関心を捉えているか、遊びについて理解できているか、必要な教材研究や環境の準備をして援助できているかなど、押さえるべき教師の力量も多様に求められる。そのため、子どもが自由に遊ぶままに放任されている園もあれば、教師から課題が次々に与えられ、子どもは言われたことに従っている園もあるなど、その幼児教育の内容や質の差は非常に大きいのが現実である。

区立幼稚園での保育実践は、子どもの興味や関心を捉え、教師が工夫した環境を構成した中で、充実した遊びが展開されている。区立幼稚園の教師は日頃から研鑽を積み、園内研究を行うことで、こうした遊びを中心とした保育について学ぶ機会も多い。就学前教育の重要性を鑑みると、区立幼稚園の保育実践が区のモデルとなって、中野区全体に広がっていくような拠点とすることが重要である。区立幼稚園がしっかりと残ることで、私立幼稚園や公私立保育所等での就学前教育の質の向上を図っていくことができると考える。

2. 社会状況と保護者の要望を反映した建替整備を実施する

質の高い就学前教育を行っているのが区立幼稚園であることを実感している保護者も多い。しかし保育時間が短いことや、給食の提供がないことから、区立幼稚園を選択できない家庭もある。中野区の区立幼稚園に誰でも通わせることができるよう、整備をすることが求められる。東京都特別区立幼稚園の現状を見ても、無償で配達弁当や給食を導入している区が増え、預かり保育の時間を延ばす対応をする園も増えてきている。また、区立幼稚園の教育の良さや教師の力量を活かし、区立園として存続させるために、幼稚園型認定子ども園として園舎改築を進めている区もある。施設設備の建替は高額な工事費が伴うので、今後のいろいろな可能性を視野に入れて、給食室や一時預かり用の保育室、特別な配慮を要する子どもたちのための空間や個別相談室などの整備を計画することは、重要だと考える。

3. 中野区教育政策の拠点となる

子どもにとってふさわしい園環境のモデルを区として示すことも重要であろう。さらに、区立幼稚園の施設に、区の就学前教育センターや研修施設を併設するなど、区内の研修会や幼小接続等の拠点となれるような建物となっていることが望ましい。2園の区立幼稚園の場が、幼保小連携の拠点となり、就学前教育の拠点となり、地域の子育ての拠点となることで、区の教育委員会として進めたい教育政策の実現を果たしていくことができると考える。

中野区の未来は、ここで教育を受けた子どもたちが将来担ってってくれるはずである。自分が尊重され、自己充実感をもった子どもたちが、社会や他者のために力を尽くすことが楽しいと感じるような、自分の育った町である中野区を愛するような、資質・能力の高い子どもを育成したい。教育のはじまりとしての幼児教育が大切であるので、区立幼稚園を要として、区内の私立幼稚園や公私立保育所全体の保育実践の質を高めていかれるようにしてほしい。

以上のような区立幼稚園の存在意義を踏まえた建替計画を、よろしくお願いします。

第5章 今後の区立幼稚園のあり方

1 中野区が目指す幼児教育の姿

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を身に付ける極めて重要な時期です。幼児教育において、子どもたちが、遊びや集団生活の中で豊かな体験をすることにより、人と関わる力や学びに向かう力、思考力・判断力・表現力を育み、生きる力の基礎を身に付けることを目指します。

また、特別な支援が必要な子どもが増加しているため、全ての子どもが、安心して幼稚園での生活を送れる環境の整備に取り組みます。

幼児期から学齢期にかけては、就学前教育・保育施設、小・中学校が教育内容や指導方法等について、それぞれの発達段階を踏まえ、良さを理解し、15年間の学びの連続性を意識した教育を展開します。

2 区立幼稚園の役割と機能

第4章までの検証を踏まえ、区は、区立幼稚園を建替整備し、幼稚園運営を継続することとします。

今後の幼稚園運営にあたっては、社会状況の変化に対応しながら、1「中野区が目指す幼児教育の姿」の実現に向けて、区立幼稚園がこれまで果たしてきた役割を継続するとともに、新たに以下の役割・機能を充実させていきます。

- (1) 多様な子どもが通い、一人ひとりが安定して学べる幼稚園を実現し、インクルーシブ教育の取り組みをさらに推進します。
- (2) 家庭と共に取り組む食育を通して、食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心を持つことで、食材や生産者、調理に携わる人に対して感謝する気持ちを育みます。
- (3) 保護者の就労状況やライフスタイル等に関わらず、子どもが安心して過ごせる環境を提供します。

3 今後の取り組み

2「区立幼稚園の役割と機能」を実現するために、以下の取り組みを進めます。

(1) 多様な背景を持つ子どもを受け入れる施設の整備

現園舎は、特別な支援が必要な子どもの利用が考慮されていないため、建替にあたりユニバーサルデザインに対応した施設として整備します。

また、特別な支援が必要な子どもがクールダウンできる部屋を、保育室とは別に設置することも検討し、全ての子どもが安心して通うことができる環境を目指します。

これらの環境を整備するとともに、施設全体として子どもたちがそれぞれの個性に応じた活動ができるような空間をつくり、一人ひとりの主体性や創造性を育んでいきます。

(2) 昼食の提供

保護者の就労状況やライフスタイルが多様化している中で、幼稚園での昼食の提供が求められています。そのニーズに応えるために、保護者の手作り弁当以外にも選択できるようにします。

加えて、食することの喜びや感謝の気持ち等、豊かな心を育み、食生活を広げていきます。

(3) 預かり保育（幼稚園型一時預かり事業）の拡充

現在、教育時間の後に行っている預かり保育を、教育時間の前にも時間を設けて実施します。

また、幼稚園の建替にあたっては、子どもが長時間園内で過ごすことに配慮し、家庭的な雰囲気がある一時預かりのための保育室を整備します。

4 定員の柔軟な見直し

現在、区立幼稚園では3歳の定員が16名、4歳、5歳の定員が32名、合計80名の定員となっていますが、3歳は定員以上の応募があるのに対し、近年は、4歳、5歳は定員を充足することが難しくなっています。

今後の区立幼稚園の定員については、子どもの幼稚園教育を希望する家庭のニーズや地域の状況に応えるために、適宜、定員の柔軟な見直しを図ります。